

学習院女子短期大学 国語国文学会 会報

22

平成5年2月

〒162 東京都新宿区戸山三丁目二〇番一号

学習院女子短期大学国文学研究室内

学習院女子短期大学

国語国文学会

電話 東京 (03) 3303-1906(代表)

振替 東京六三三六番

人稱の場

高橋 新太郎

日本語の第二人称の多様さがよく言われる。これは一人称についても同様だろう。自分でも、時、処、その場の気分によってワタクシ・ボク・オレを自在に使用している。

数年前に二十九歳の若い命を痛て失ったわが友山内美穂は、十代から週刊誌のフリーライターをつとめながら、作家を目指していた。彼女は女性をしか愛せないヒトだった。童顔の美穂さんは、自らをワシと言いつつ慣らわし、共生の相手をオマエとよび、話題にするときはウチノツマハ……と、はにかんだ。

ボクはウチノカミサンのことをアナタと呼び慣らわしてきた。彼女が三歳年長であつたから敬意を表してそう呼んだわけではないのだが、当たらずさわらずの、多少よそよそしい感じのあるこの呼び方が、なんとなく気に入っていた。ニョーボーもボクをアナタと呼んでいたが、娘が生まれてからは、トウチャヤマと呼ぶことが多くな

った。二十近い口うるさい女を子供に持った覚えはないと言つてみたい気もしたが、この子供中心のよび方になじんでしまった。娘が成長して嫁に行った。娘夫婦の会話を聴いてみると、ムコ殿は、自分の妻をキミ、娘は夫をアナタとよび、時には老人に耳障りな愛称でよび合っている。フランス語を習い初めの頃に「*Moyen*」なるものを知った。「*home*」から「*me*」への呼び変えが、人間関係の親密度の深まりの証しであるとのことだった。アナタからオマエへの呼称の変化と言つてもよいだろう。

娘が高等科に上がりたての頃だったようにおもふ。常にないつよいいさかいを母子でしることがある。日ごろ母親をオカアチャマとよびならわしていた娘が、ヘアナタハ、ソウ、オツシヤルケレドモ……との突然の他人行儀の開き直りに、カナイは鼻白むでしましおもわず絶句してしまつたことがあつた。この健気な、娘の親離れの快挙に小生が拍手を送つたことは言うまでもない。もちろん心の内でのことだが。

男子高等科で、血気盛んな若者達を相手にしていた頃は、オレ、オマエで通した。いささか乱暴な言い方ではあるが、それなりの濃密な人間関係であつたように思う。短大に移つて女性専科となつて

